

通常通りに進まぬ環境…工事止めないことを優先

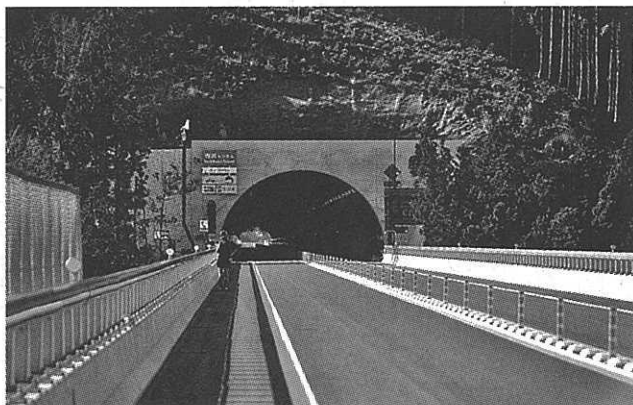
東日本大震災から  
11年

国境なき技師団が1日に開催したオンラインセミナー「災害復興プロジェクト、現場代理人が語る」で、清水建設土木技術本部長上席エンジニアの三原泰司氏が講演した。岩手県大船渡市の「吉浜道路工事」（施工：清水建設・青木あすなろ建設）で、三原氏は現場の陣頭指揮を執った。復興のリーディングプロジェクトとなる道路整備で体験した苦労や技術者としてのやりがい、地域への思いなどを話した。

被災地域で大規模工事を施工するプロジェクト。当時に

## 清水建設 三原泰司氏が吉浜道路工事回想

### 国境なき技師団 災害復興セミナー



吉浜トンネル（15年撮影）

ついで「普通ではない環境の中で果たすべき役割を考えていた」と振り返った。施工時には周辺住民への配慮を大事にした。トンネル掘削時には発破音が地震を連想させないようにするため、防音壁や防音扉を導入したエピソードを紹介した。

資材調達の苦悩も紹介した。復興需要で地元の資材会

社に受注が集中し「電話一本で資材がすぐに届く環境ではなかった」と振り返った。骨材は地元セメント会社の系列企業から調達。「確実に調達できるものを使い、物量に余裕を持つようにした」と話した。

作業員不足も大きな課題だった。現場では作業を機械で代替する割合を増やし乗り切った。「オーバースペックになっても、当時は工事を止めないことを優先していた」と当時の状況を語った。

最も心に残っているエピソードとしては、トンネル開通後に地元住民から感謝のメールをもらったことを紹介した。工事ではトンネル貫通時に感動を感じることは多かったものの、利用者から感謝を伝えられる機会はなかった。公共工事が多くのエンドユーザーを抱える事業であること

をあらためて認識し「ありがたい、かけがえない経験になった」と話した。